

# 回 想 末松廃寺と父高村誠孝

末松廃寺跡保存会 高 村 宏

## 1 はじめに

私の父、高村誠孝が和同開珎の銀錢を発見していなかったら、今の末松廃寺跡は無かったと言ってくれる人がいる、確かにそうだと私も思う。しかし歴史的事実を究明し、保存しようと言う末松および野々市町の住民、ならびに町・県や国の関係者の熱意が今日の末松廃寺跡を作り、今回の発掘調査報告書を完成させたと思っている。誠に目出度いことで、父が生きていたらどんなに喜ぶことであろう。末松廃寺跡保存会としてもお礼を申し上げたい。

昭和41年から42年にかけて発掘調査が行なわれ、42年後の今、調査報告書が世に出ることになった。それ故に、最新の調査研究まで、全て盛り込まれることになり、興味深く、意義深い報告書になった。

発掘当時は、この地を支配していた道の君の氏寺と位置付けられていた。その後末松廃寺を取り巻く周辺の発掘調査が進み、これらを総合して、今回、末松廃寺が、天智系の国家プロジェクトで、石川平野を開発するシンボルタワーであったと言う新しい説が提唱された。これは非常に興味深いことであり、今後議論が更に深まることを期待する。

## 2 高村誠孝と末松廃寺跡

父は、大きなスクラップブックに末松廃寺の記録を残している。今日はこの中からピックアップして話をしたい。

明治41年に、末松一円で耕地整理が行われ、父は当時13才の少年であったが、この地に数多く残っていた古墳が工事によって破壊されることに心を痛め、あちこちで発見される瓦や土器を見て、この地に在ったと言う寺の解明をしたいと思う様になった。

当時の耕地整理の現場を写した珍しい写真が残っている。(写真1)

昭和12年3月、最初の発掘が行なわれ、当時の新聞記事には、東大寺を偲ぶ加賀国分寺跡と言う見出しが踊っている。

発掘現場の写真や調査に参加した村人、出土品、の写真も残っている。(写真2, 3)



写真1 明治41年 耕地整理の風景



写真2 昭和12年最初の発掘現場



写真3 発掘に参加した村人と出土品

昭和36年3月24日、父は末松廃寺跡から和同開珎の銀錢を発見した。父の記録によると、昭和36年の春は雪解けが遅く、史跡が雪害で破損していないかどうか、何時もの様に見守り中、金堂脇の水路に、黒く光るものを発見、最初寛永通宝かと思ったが、手にとって見ると和同開珎の字が読み取れた。早速家に帰り、末娘の高校の歴史参考書から、日本最初の貨幣、和同開珎と確認した。

父は、大変な物を見付けたと非常に興奮していたことを、私ははっきり記憶している。たまたま偶然の発見であるが、息子の私は、決して偶然ではなかったと思っている。父は、それ程頻繁に史跡を見まわっていたし、雪解けの増水した川底で、埋蔵している遺物が洗い流されて時々露出することを知っていたのである。

(写真4 高村誠孝が発見した和同開珎)

(写真5, 6

数年後に発見現場を再現した風景)

同年、4月12日、石川県教育委員会を訪問、野口主事は、以前、三子牛山で、和同開珎600枚が出土したが青錆の腐食が激しかった、しかし、これはどうしてこんなに綺麗なのか、不思議だ?と驚いたそうである。そして当時、石川県誌編纂主任の川良夫氏に鑑定を依頼したが、同氏も不思議だと驚いたそうである。



写真4 高村誠孝が発見した和同開珎

2日後の4月14日、当時考古学の最高権威者、奈良国立博物館館長、石田茂作氏を訪問。



写真5, 6 数年後に発見現場を再現した風景

石田茂作氏は、和同開珎の銀銭である事を確認、これは大した物が発見されたと、発見の経緯を聞かれたと云う。

父は、このように行動力があつた上に、物事を正確に記録するという習慣が身に着いていたようである。技術屋の私には、まね出来ないことである。

和同開珎の銀銭は、当時、大和の国小治田安麻呂の墓から10枚発見されて以来、全国で、2番目の発見であった。

和同開珎銀銭の発見が契機となり、末松廃寺跡の発掘調査が始まることになった。

### (1) 昭和38年10月、野々市町教育委員会、石川考古学研究会の予備調査

写真7、8は、予備調査の状況を示す。



写真7 予備調査風景



写真8 予備調査の現場

### (2) 国営調査

昭和41年9～10月 国営第1次発掘調査…………… 事業主体野々市町

昭和42年7～9月 国営第2次発掘調査…………… 事業主体文化財保護委員会

鍬入れ式には、当時の石川県知事中西陽一、野々市町町長中島栄治氏が参加した。



写真9 中西知事に説明する父



写真10 第一次発掘調査の風景

国営第1次、第2次発掘調査では、奈良国立文化財研究所の技官、石川考古学研究会の先生方、国学院大学の学生、高校の地歴部の部員、末松集落の皆さんが参加した。



写真11 第一次調査に参加したメンバー

私の家が、一部の技官の宿舎になっており、縁先が出土品の置場に当てられていた事から、技官達の資料整理の場でもあった。

写真12 第1次、第2次調査を指導した  
奈良国立文化財研究所技官 川原純之氏



昭和43年1月16日、永年史跡の保存に努めた功により父は黄綬褒章を頂いた。受賞式は、皇居で行なわれ、母も同伴し、二人にとっては、最高の一日だったと思われる。



写真13, 14 黄綬褒章授賞式

昭和46年5月30日、末松廃寺跡保存整備事業が終了、史跡公園完成式が挙行された。



写真15, 16 史跡公園完成式

昭和46年9月7日

三笠宮崇仁親王殿下が末松廃寺跡を視察。  
父は、晴れ晴れしく説明者の一人に加わっていた。

写真17

三笠宮崇仁親王殿下が末松廃寺跡を視察



昭和47年11月3日、野々市町文化賞第1号を受賞

晩年の父、は何時も机に向かって何かを書いている、そんな記憶が強く残っている。

### 3 あとがき

若し父が生きて、今日のシンポジウムに参加出来たら、あまりの様変わりに驚くであろう。父に成り代り、感謝の意を表したい。

末松廃寺跡の研究はこれで終わったのではなく、更に研究をし、議論を深めて頂きたい。また、研究者を招いて、市民レベルの分かりやすい勉強会も開催して欲しい。

野々市町の歴史資産の保存や公開は必ずしも十分ではない。歴史博物館を作り、野々市町の歴史が、市民にまた外来者に分かるようにして頂きたい。